



創刊にあたって

永積, 安明

(Citation)

国文神戸, 創刊号:1

(Issue Date)

1968-06

(Resource Type)

other

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100481930>



創刊にあたって

永 積 安 明

神戸大学文学部国語国文学科が卒業生を送りだしてから、十三年を経過した。卒業生の中には、多くの国文学研究の専門家が育ち、彼らはそれぞれ独自の研究方法を身につけ、その研究成果にも見るべきものが少なくない。

かつて一九五三年六月には、神戸大学国語国文学会から「国文論叢」が創刊され、一九六〇年五月の第八号まで継続刊行された。もともとこの会は、神戸大学に所属する国語国文学関係の教員が中心になって発足し、やがて卒業生を迎え入れるという経過をとってきたが、会誌は第八号までで休刊され、その続刊は宿題となっていた。

神戸大学文学部の大学院文学研究科設置の計画が具体化しはじめた過去二、三年来、卒業生たちの間でも、新しい国文学研究誌を持ちたいという要求が急速にたかまって、討議をかさねた結果、大学院設置と期を同じくして、新しい会誌が誕生することになった。

新しい会誌は「国文論叢」時代とちがいで、教員の手を煩わすことなく、文学部国語国文学科卒業生の自発的な創出であることが、各大学の国文学会誌と、いささか相違するところかと思う。そういう自発性が、この会誌の論文をどれだけかさえているかは、今後発表される論文そのものが答えるであろう。

近来、国文学会には各大学の紀要・研究誌のほか、おびただしい学会誌・同人誌・商業誌等々が、まさに氾濫しており、国文研究論文の大量生産時代が出現している。このような現状のなかで、さらに会誌を送り出す必要はどこにあるか。単なる発表機関を同窓会的に持つというならば、それは全く有害無用なことである。この会誌が現在、存在理由を持ちうるかとすれば、むしろ同窓会的・商業的等々の国文学誌氾濫とそれを成り立たせている既成の閉鎖的な国文学会の大勢に対する根本的な疑問と、それにもとづくラジカルな批判だけである。

自発的に創出された新しい会誌は、出発において、その資格のなほどうかを持つに相違ない。しかし問題は、今後発表される論説そのものが、この可能性をどれだけ実現するかにかかっている。創刊にあたって、はしがきの寄稿を求められたので、私見を述べてあいさつにかえるが、会員の協力と相互批判によって、会誌誕生の意義が、時を追って鮮明に実現されるであろうことを、私は心から期待している。